

(演題) 欠損補綴の目的から考えるパーシャルデンチャー・オーバーデンチャー

奥森 健史

欠損補綴治療においても、可撤性装置であるパーシャルデンチャーやインプラントを含むオーバーデンチャーも重要なオプションではないでしょうか。そのクロスアーチにまたがる欠損補綴装置にて機能の回復、審美性に改善を目的としています。換言すれば欠損部に対し咀嚼ユニットをいかに適正なポジションに回復し、口腔内にてどう維持・安定させるかが勘所となります。患者可撤性装置、術者可撤性装置、いずれにせよ上下顎の欠損状態から補綴治療終了後にその予後のリスクも予測し再介入時の“次の一手”を考えておくことも必要ではないでしょうか。口腔模倣において、歯を復元させるプロセスには、“色”“形態”という目に見える部分と、それらが歯列として、一体化しそこへ加わる機能的考察すなわち目には見えない“咬合力”という部分をどうコントロールするのか、ラボサイドにおいてもその部分をpushして日常臨床に生かせれば、高い水準でチェアサイドとのコラボレーションにつながるのではないのでしょうか。

演題「機能するためのパーシャルデンチャーワークとその着目点」

小山 邦宏

欠損補綴における対応でパーシャルデンチャーが依然多数を占める中、その対応においてはまずパーシャルデンチャーの入る環境を整える、すなわちマウスプレパレーションが重要であるが、その理論に裏付けられた正確な技法があつてこそ機能と永続性に結びつく。残存歯への対応は臨床上容易ではないケースが数多く存在するのも事実であるが、欠損歯列と残存歯の状態は個々により多様であり、その欠損に対応する補綴装置も近年、デジタル技工も多くなっているが、しかし歯科技工士の手技的製作理論によるものがなければデジタルというだけでは結果を生むかは疑問である。そして携わる歯科技工士の押えておくべき知識は変わらない。本講演では機能するパーシャルデンチャーを製作するために必要な理論的製作要点を述べたいと思います。

演題：「総義歯と咬合 ～これからの歯科技工と展望～」

佐藤 幸司

最近の歯科医療ニーズの動向によると、在宅歯科医療および高齢者歯科医療の充実が求められ、義歯の質的需要が高度化して来ています。

歯科医療現場も高度に発達した歯科医療技術の進歩により、歯が喪失した無歯顎者の疾病構造も著しく変化してきていると思われます。義歯製作もより簡便で、客観的な根拠から効率的な“二義的人工臓器義歯“の製作システムと供給体制が求められています。

総義歯の製作で最も重要な要素は印象採得・咬合採得であると考えます。そこから模型を分析し正確に咬合器装着を行い、客観的な咬合平面の構築により症例に応じた人工歯排列と咬合様式を考察することが重要な要素であります。

無歯顎補綴の仮想咬合平面の設定基準は、歯冠修復補綴・インプラント補綴の製作ガイドラインとしても応用されます。

臨床模型の分析及び解析により、解剖学・発生学・生理学から異なる臨床症例に対する咬合平面の設定と咬合彎曲の与え方について生理学的、力学的に考慮し適切な部位に人工歯排列を行い、筋組織と口腔内に調和した咬合と咬合様式を付与することが重要であります。

最後に歯科技工の展望とデジタルデンチャーについて考察し有意義な講演会になれば幸いです。

(演題) 多数歯欠損症例によるチェアサイドとラボサイドのコミュニケーションの重要性

今西秀郷

現在わが国では、超高齢化社会に突入し高齢者が増加の一途をたどっています。

しかし口腔内の状況だけを見ても、歯科医療の発展とともに、平均残存歯数は年々増加している。という事は、これから欠損補綴治療は増加し、我々歯科技工士が製作を担う欠損補綴装置のニーズは、増々高まってくるのが容易に予想出来る。その中であらゆる欠損様式に対応が可能な RPD (Removable Partial Denture) は非常に重要なファクターではないであろうか？ 適切な前処置、力学的に考察されたマウスプレパレーション、適合のよいメタルフレーム、予知性の高い残存歯への治療、が行われた長期的に安定している RPD を製作するにあたり、歯科技工士が身につけなければならない知識、スキル、チェアサイドとのコミュニケーションの重要性に重点をおいて、お話させて頂きたいと思えます。

(演題) 機能咬合のワックスアップ「Sequential Occlusion」

榊原功二

歯冠の形態は完全に遺伝的に決定される唯一の器官である。それゆえに口腔、咀嚼系の諸構造は歯に影響されるということであり、歯の形態、そこには下顎の機能的な運動経路や、効率的な咀嚼のパターン、など多くの咀嚼システムの機能に関する情報が凝集している。そして正常に萌出した歯列の咬合は I 級咬合 (1 歯対 2 歯) であり、この咬合様式が正常に発育したヒトの持っている咬み合わせであることに異論はないであろう。1 歯対 2 歯の咬合が下顎の運動生理学的にみて、いかに理に適ったものであるか、術者はまず “I 級咬合” の理解を深め、さらに再現するための学習としての Waxing は最も有効な方法である。また最近では咬合再構築にコンピュータ下顎運動計測器や CAD/CAM などデジタル化の導入により歯科界も大きく変革している。しかし現時点では最終の工程を訓練された歯科技工士が調整を行うことにより、患者個々の口腔内に適応し易い補綴装置の製作となると考える。今回は咬合再構築のためのルールを供覧いただきたい。

(演題) トータルの、歯科技工士力の向上を考える

西村好美

歯科技工士の資格を取得して、約 40 年。歯科衛生士の資格を取得して、早 10 年。歯科技工業界において「創造」を追求し、近年では未来へとつなぐための歯科技工とは、を考え続け、現在に至る。

歯科技工への情熱とこだわり、特に天然歯について追求した、20 代。臨床の師との出逢いと補綴治療を成功させるために歯科技工に向き合ってきた、30 代。歯科技工士としての経験の積み重ねと歯科衛生士の資格取得による補綴装置のあり方と確信を得た 40 代。

それらを基に従来の歯科技工士としてのスタイルにとどまらず、デジタル・ソリューションとの共存、チーム医療の一員としてのあり方など、トータルで補綴修復治療における臨床に対する力と補綴装置製作のレベルアップのための講演をさせて頂きたいと思えます。

(演題)インプラント治療に携わる上で知っておくべき知識と歯科技工士の役割

上原芳樹

医療の現場は日進月歩である。歯科医療現場においてもそれは例外ではない。インプラントが世に出てすでに30年以上経過し、その間に、インプラント治療における様々な術式が考案され、確立されてきた。今日では機能的な回復だけではなく、審美的な回復も目を見張るものがある。

そのような中で近年では、治療期間が短く、尚かつ低侵襲なインプラント治療に注目が集まっている。しかし、ただ早くて低侵襲なだけでは意味がない。そこにはしっかりとした機能性・審美性も達成されていなければならない。そしてそれをより正確に、安全に行うためには、我々歯科技工士の力も大きく関与する。短期間で低侵襲なインプラント治療の裏側には、歯科技工士の力が必要不可欠なのである。

そこで今回は、短期間で低侵襲なインプラント治療を成功させるために、我々歯科技工士に何ができるのか、どのような知識が必要なのかをお話しさせていただこうと思う。

(演題)天然歯牙から学ぶジルコニアセラミッククラウンの審美修復

中村 心

CAD/CAM 技術が年々進歩していくこの時代に、手法による精密かつ確実性のある補綴物が求められている。

私がセラミッククラウンを製作出来ていますのは、珠玉の技術であります片岡繁夫先生を表す大阪セラミックトレーニングセンターで学び、積み重ねてこれた過程が大きな基盤です。そのことから臨床でのセラミックス完成に重要なポイント等をご紹介します、これからセラミックスをされる歯科技工士の皆様方に伝えられることが出来たら幸いです。ジルコニアクラウンの築盛、形態修正での表面性状、また CAD/CAM を交えてのご内容とさせて頂きたいと思っております。

今後の皆様の臨床のお役に立てればと思っております。

(演題)VISION ~CREATION OF PERFECT HARMONY~

瓜坂達也

昨今、歯科材料の進化に伴いニケイ酸リチウムやジルコニアなどの普及が進み、オールセラミックの市場が拡大傾向にあります。そして、従来と比較して色調に対する要求も高まっており、術者側では使用する材料の色調特性の理解が重要になっています。

ポーセレンの多色築盛は、天然歯の構造を理解し表現することにより審美性の高い補綴物が製作可能ですが、前述の色調特性の理解をするには経験を積むことでしか得られません。

今回、私なりに天然歯の構造を具現化する方法を自身の臨床技工をもとに紹介したいと思います。

(演題) The role of Dental Technician in Minimal Intervention ～最小侵襲治療における歯科技工士の役割～

小出俊介

『MI (最小侵襲治療)』や『接着修復治療』は材料の発展と共に、歯科治療において確立されるようになってきた。この時代における歯科技工士の役割として、間接接着修復物の製作というのがあげられる。その一つとして、リチウムシリケートガラスセラミックス (ニケイ酸リチウム) を使用した、プレスセラミックインレー・アンレー等の修復物がある。リチウムシリケートガラスセラミックは 400Mpa 以上の強度でエナメル質と近似した強度であることから、接着後の長期安定が期待され使用されているのである。

今回はリチウムシリケートガラスセラミックスの中から、プレスセラミックインレーの症例を中心に、患者満足度の高いセラミックインレーの製作法をシェードテイキングからセット時の注意点までの技工作業以外のところまで細かく紹介してみたい。セラミックインレーはコツさえ掴めば若手でも簡単に結果の出るものなので、多くの方に知っていただき活用していただければと思う。

(演題) 医学部歯科口腔外科における歯科技工士の役割

田光 創

病院歯科口腔外科においては、良性腫瘍、悪性腫瘍、外傷、顎関節疾患、睡眠時無呼吸症候群、抜歯、細菌感染症、粘膜疾患、嚢胞、先天異常、歯科診療 (有病者、カリエス治療～顎義歯、インプラント)、など様々な疾患、症状の患者が訪れる。

また、病院において、周術期における歯科の重要性が認識されているため、当院でも医科分野との連携を図り、周術期口腔機能管理に関連した口腔内装置を製作している。

さらに、他科で外科手術や放射線治療、化学治療を受け、口腔に問題のある患者に対しての治療や補綴もあり、医学部病院の歯科技工士は、広範囲にわたる症例に対して、治療装置、補綴装置を製作している。今後、医科分野の医療にも目を向ければ歯科技工士の活躍の場が益々大きく広がると考えられる。

本講演では、医学部病院で日常行っている口腔外科技工と医科歯科連携の歯科技工について紹介する。

(演題) 新しい歯科業界の未来に向けて

旗手勝浩

国民の歯の健康を守るためには、歯科業界が健康的であることが大切であり、そしてなにより歯科業界の次世代に、より良い環境を構築しなければなりません。今回の講演では、歯科業界改革の会の活動内容はもちろんですが、みなさんもお存知の通り、現在、世の中が大きく動き、歯科業界そして歯科技工業界も変革期に入っている中、私の歯科技工士としての観点からも新しい歯科業界の未来に向けて話したいと思います。

(演題)実践・生体との調和を求めた補綴物形態の捉え方 ～より生体に順応させる正しいクラウンフォームとは～

藤本光治

我々、歯科技工士は補綴治療チームの一員として色調・形態・顔貌との調和（審美的調和）のみならず機能的調和・生物学的調和をトータルで達成すべく技術的研鑽と知識の修得につとめ、補綴修復治療の成功に貢献しなければならない。その中で歯科技工士が製作する補綴物形態が大きく影響することは言うまでもない。

1本のクラウンに着眼してみると咬合の安定・顎関節・付着器官などへの影響を及ぼす咬合面と清掃性・歯肉の健康に大きな影響を及ぼす軸面から成り立っている。補綴物形態の基本は天然歯解剖学的形態であるが力と炎症によるトラブルを回避するために天然歯以上に生体に順応させる配慮が必要となる。

本セッションでは補綴物軸面形態を中心に生体に不調和になる原因を考え分析するところから、補綴製作までを天然歯解剖学形態および文献から考察し“実践的”に知識と技術を臨床に落とし込み治療結果に反映した症例を通してお話しさせていただきたい。

(演題)女性歯科技工士活躍プロジェクト from Osaka

森 直美、メーケルブルグ明美

大阪府歯科技工士会では、女性歯科技工士の活躍推進を掲げ、平成23年女性部会を発足し、8年が経過した現在、女性歯科技工士の活躍の場はますます高まっています。

日本の少子高齢化が深刻化し、各業界の労働力不足が叫ばれるなか、政府による「女性活躍推進」が進められ数年が経過しました。この間、少子化で全国の歯科技工士学校が、定員割れ、閉校するなか、技工士学校の6割が女性となっています。今後、歯科技工業界においても、超高齢化社会を迎え補綴物の需要が高まる中、女性歯科技工士の活躍が叫ばれている状況である。

今回は、今現在の大阪の女性歯科技工士の現状を紹介し、未来の歯科技工業界への活躍を模索、検証する。

(演題)オパーク色セメントを使用した症例

松山真也

近年、オールセラミックスのマスクングについてのテクニックが様々紹介されているが、筆者は変色支台歯に対するオールセラミックスでの補綴において、以前は全てのケースでフレームに何かしらのマスクングを行い製作していた。しかし临床上、築盛のクリアランスが不十分であったり、非常に強い変色支台の場合、複雑な技工作業が要求されることも少なくなかった。またクラウンの仮着からレジンセメントの本着にいたるケースにおいて、仮着セメントの不透明さにおけるマスクング効果を考慮せずに、透明なレジンセメントでクラウンをセットしてしまい、最終的にクラウンの明度が低下してしまったことがあった。そんな経験からオパーク色のレジンセメントをこちらからドクターサイドに指定しセット時に使用してもらっている。

そこで今回筆者が臨床において活用しているレジンセメントのオパーク色によるマスクングの有用性について考察を行いたいと思う。

(演題) シークエンシャルオクルージョンのデジタル診断システムと補綴設計のデジタル化

前川泰一

「デジタル」という言葉が業界を盛り上げている。デジタル化とは CAD/CAM 装置を代表に考えられているが、「咬合」という分野で、シークエンシャルオクルージョンの咬合分析システムは、顎運動を可視化し数値に置き換え、感覚に頼ることの多かったアナログな診断作業を、デジタルを取り入れる事により科学的に咬合を解析してきた。デジタル機器を使い診断することで、術者の技量の差を縮め、誰もが同じ方向性の診断ができるように考えられている。個々の患者をデジタルで診断し、咬合高径、咬合平面を設定し口腔内の設計を行う。

今回はこのシークエンシャルオクルージョンの診断システムの解説と、その診断に対して補綴治療を行う上で、デジタルな要素、アナログな要素を使い分けて機能的咬合面を構築する方法についてお話をさせていただきます。

(演題) 若い人たちに「歯科技工」をバトンタッチしていくために

槇田大介

歯科技工物を製作するには個人の技量やセンスが求められることは論を待ちません。

歯科医師の先生方、そしてその向こうにいらっしゃるクライアントの満足を得る為には高度な知識と卓越したテクニックが求められます。ゆえに国家資格を取得した後も歯科技工士としての知識と技術の研鑽は続きます。歯科技工士は歯科技工の知識と技術があれば良いのでしょうか？

今、若年人口が減少しています。一般業界では各業界が若い人を確保するために智恵とお金と時間をかけています。歯科技工業界が旧態依然とした考え方のままであれば、業界全体が衰退してしまう道をたどるのではないのでしょうか。今の自分が糧を得ることさえできれば良いのでしょうか？

今の歯科技工業界に必要な事は何なのか。歯科専門の人材紹介業として携わってきた者の目から見て思う事をお伝えいたします。

(演題) 明日から使える模型製作の基準 ～咬合平面を意識すると臨床が変わる～

西岡健一

歯科技工における最終目標は顎口腔系の機能回復はもとより審美的に良好な歯列や口腔内に長期に渡り調和した補綴物を製作する事が非常に重要である。

また予防医学や歯周治療学が進歩して齲蝕や歯周疾患は、かなり減少している傾向に思えるが、高齢化社会の到来と共に欠損補綴の割合は、今後も増大することが予想される。補綴物の製作にあたり経験値は非常に重要であるが、患者の分析資料や咬合平面などの根拠に基づく情報があれば、作業時間も短縮でき整合性の取れた技工物の製作が可能になると考える。

近年、歯科技工技術が要求される時代において患者情報を歯科医と共有しながら、最終イメージが歯科技工士に把握でき具現化できる事は非常に重要である。

今回お話をさせて頂く内容は、技工作業の最初の基準となる模型分析から咬合平面、咬合の与え方について臨床例を交えて紹介させていただきます。明日から使える技工作業の手助けになれば幸いです。